

目次

訳者まえがき	ix
第1章 ことばとは何か	1
E言語とI言語	5
E言語の研究の意外な難しさ	14
コーパスと代表性	19
BNCと言語経験	23
ワールドワイドウェブ：「言語学者の格好の遊び場」	25
第2章 辞書と文法書——言語知識の生成文法モデル	29
言語知識に対する規則中心的アプローチ	34
下位カテゴリー化	37
選択制限	39
一致索性	40
データから見た生成文法モデル	40
explain me	43
語彙	50
複合語 (compound)	54
派生語 (derived word)	57
統語的構文 (syntactic construction)	58
合成性	62
結語	65
第3章 語とその振る舞い	67
語彙カテゴリー	69
独自の分布を示す語	73

lap「膝」と bosom「胸」.....	77
fun	83
絶対複数 (pluralia tantum)	90
much.....	91
動詞とその下位カテゴリー化	98
ゼロ補部.....	102
不完全動詞 (defective verb).....	105
結語	108
第 4 章 イディオム	111
意味的イディオム	115
イディオムの可変性.....	121
イディオムへの間接的な言及	128
統語的イディオム	135
the more the merrier 「多ければ多いほどよい」.....	136
Him write a novel!? 「彼が本を書くだって!？」.....	139
What about me? 「私はどうなるの」.....	140
that idiot of a man 「あの愚か者の男」.....	141
That'll teach you! 「これで懲りただろう」.....	147
What's it doing raining? 「どうして雨なんか降っているんだ」..	148
句のイディオム.....	154
副次的な (不) 規則性	158
第 5 章 イディオムに溢れた日常言語	163
言語と使用コンテキスト	167
語とコロケーション	172
イディオム的に (その言語らしく) 話せるようになるには.....	182
事例研究: X-minded.....	185

第6章	構文	193
	認知文法：いくつかの基礎概念	193
	構文	198
	(a) 内部が複合的なものとしての構文 (= 構造)	198
	(b) 形式と意味のペアとしての構文	200
	(c) 単位としての構文	201
	構文か規則か？	203
	規則を適用する：それはどのようなプロセスか？	211
	統語構造の自律性と構文	217
	コロストラクション分析	221
	習得	225
	どこまで行っても構文？	226
第7章	頻度	229
	頻度に対する Chomsky の考え方：オハイオ州デイトン論	233
	動詞の補部	237
	語	240
	ここで再びコロケーションへ	245
	音韻論	250
	曖昧性の解消と袋小路文	254
	生産性	264
	頻度に対する主観的評価	267
	結語	271
第8章	言語の設計特性としての頻度の偏り	273
	言語の創発的特性としての頻度の偏り	274
	有標性	277

	カテゴリー化	281
	言語の設計特性としての頻度の偏り	294
	結語	295
第 9 章	インプットから学ぶ	297
	音素の習得	298
	統計的学習	306
	聞き手はインプットの特徴に気づいているのか?	312
	新近性効果	314
	新近性とマイクロ学習	319
	結語	327
第 10 章	多義性	331
	多義語には意味はいくつあるか?	333
	open と cut : 一括 (統合) と細分 (分割)	337
	多義語のもつ意味間の関連性	346
	単一の言語形式?	349
	over 物語	353
	多義性と言語の理想化認知モデル	362
	語の意味	367
	結語	371
第 11 章	創造性と革新	375
	創造性	376
	創造性と革新	381
	言語変化	383
	being busy	385
	explain me	394

all over から見るイディオムと使用範囲.....	396
結語	404
第 12 章 ブレンディング	407
ブレンディング理論.....	408
単語のブレンディング.....	411
句のブレンディング	417
keep an eye out.....	422
ever since I can remember.....	422
time and (time) again	423
being as how.....	423
I think that's fair to say	424
the most beautiful girl in the world.....	426
explain me this	429
単語と構文のブレンディング	429
結語	433
第 13 章 メンタル・コーパス	435
参考文献.....	447
解題——「メンタル・コーパス」が示唆するもの	481
I ことばの知識は動的に更新される使用の記憶でできている.....	481
こころの中の「コーパス」とは.....	481
構造・機能・発達	484
提言	486

Ⅱ 『メンタル・コーパス』から考える英語の学び方と教え方	486
教室での中道1(学習項目):スキーマとインスタンス	486
教室での中道2(学習姿勢):理解と記憶	489
提言:生徒も教師も教室の外へ!	491
推薦図書	494
Ⅲ 認知言語学におけるメンタル・コーパス革命	494
言語知識とは:認知文法の考え方	495
メンタル・コーパス革命とは	497
参考文献	500
人名索引	503
事項索引	511

訳者まえがき

本書は John R. Taylor (2012) *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*, Oxford University Press の全訳である。原著の画期的かつ多面的な意義については巻末の3編の解題をお読みいただくことにして、ここでは、その意義を日本の読者に十分伝えられる書物にするために特に意を用いた点を記しておきたい。

原著の明晰さと緻密さを日本語で再現するために、訳者間で最初原稿に忌憚なくコメントし合って完成した修正稿について、平沢、長谷川、西村の3人が、正確さと読み易さの観点から、さらに徹底的に点検して改訂を加えた。これによって、英語の母語話者と少しも変わらない正確さと容易さで、日本の読者が原著の優れた内容を理解することが可能になったと自負している。

原著にはコーパスからの実例が相当数用いられているが、本書ではそのすべてを訳出した。その際、(たとえばコンテキストが不明のために)英語の母語話者でもわかりにくい例も含めて、あらゆる手を尽くして、正確でわかりやすい訳になるよう心がけた。

原著には明らかな誤りと思われる箇所が少なからず認められたが、それらは(必要と思われる場合にはその旨を明記して)すべて修正して訳出した。いくつかの修正に際しては、訳者以外の専門家に意見を求めた。また、主として言語学が専門でない読者のために、かなりの数の訳注をつけた。さらに、長谷川が中心となって、原著とは異なる事項索引を独自に作成した。

本書を作成する過程で以下の方々に大変お世話になった。心から感謝の意を表したい。

Robert Geller 先生(東京大学教授)と Ash Spreadbury さん(慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程)には、コーパスからの実例を含む英語表現についての訳者からの度重なる質問に忍耐強くお答えいただいた。

田辺正美先生(青山学院大学教授)には、第3章と第5章の翻訳について多くのご助言をいただいた。

池上高志さん(東京大学教授)には、原著の統計学に関する記述の誤りを訳注の形でご修正いただいた。

山本史郎先生(東京大学教授)には、コーパスからの実例のうち文学作品中の文例の適切な訳をご教示いただいた。

斎藤純男先生(東京学芸大学教授)には、音声学、音韻論に関する記述についての質問にお答えいただいた。

木村英樹先生(東京大学名誉教授)と小嶋美由紀さん(関西大学准教授)には、中国語に関する記述についての質問にお答えいただいた。

石塚政行さんと野中大輔さん(ともに東京大学大学院人文社会系研究科博士課程(言語学研究室))には、それぞれフランス語の例文とコーパスについて、貴重なご意見をいただいた。

慶應義塾大学経済学部在籍の白戸千恵子さんと、TeXShop 開発チームの一員であり TeX2img の開発者でもある寺田侑祐さんには、それぞれジャズとコンピューターに関連する例文の内容や背景について情報を提供していただいた。

山田千晴さん(早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程)には、心理実験に関わる用語について適切な訳語を教えていただいた。

くろしお出版の池上達昭さんには、本書の企画から完成に至るまで、言語学を深く理解する編集者ならではの行き届いたお仕事をしていただいた。

2017年4月
訳者を代表して 西村義樹

第1章

ことばとは何か

本書の読者であれば、次のような状況になじみがあるだろう。スピーチや論文や報告書を書いている。そして、ふと思い出す。今書いていることに使えそうな一節を少し前に読んだことがあると。そこで、それを引用するか、せめて話題にしたいと思うだろう。しかし問題は、そのページにしおりを挟んだり、その一節に印をつけたりしなかったことである。そして、たった1つの箇所を探すのに、200ページもの本を再読する時間もなければ、そうする気にもならないという状況である。

こんなとき、ヒントがすぐに見つかることもある。何ページにその文があったかは思い出せなくても、開いたページのどの辺りにあったかというイメージは頭の中に確実に残っているのである。たとえば、左側のページの上から1/3ほどのところ、段落のはじめから数行目といった具合である。そこでページをめくり、左側のページにざっと目を通し、上から1/3ほどのところからはじまる段落を見ていく。このやり方は案外うまくいくことが多く、ほんの数分で目当ての一節が見つかる。そして多くの場合、実際に読み直してみても、「ほら、やっぱり使える」と思うのである。

私がこういった話をするとうまく、自分もそのような経験をしたことがあるという反応が返ってくる。もちろん、疑り深い人であれば、本当にうまくいくだろうかと思うだろう。もしかすると、単にこういったやり方でうまくいった事例を少しばかり覚えているだけで、うまくいかなかった多数の事例を封印しているだけかもしれないからだ。ところが実際、「ページのどの辺りに文があったかを覚えているという現象」は実在することが実験によって確かめられている (Lovelace and Southall 1983; Rothkopf 1971)。それだけ

でなく、ページのどの辺りにあったかを覚えているということは、内容を覚えているということと連動している。すなわち、何が書いてあったかを覚えている読者は、それが書いてあった場所も同時に覚えている傾向にあり、どこにあったかを覚えようと思っても覚えようがない場合（たとえば、コンピューターの画面上で文章を上から下にスクロールしながら読んでいくような場合）、文章の理解が妨げられることがある。文書を印刷して紙で読みたいという人がいるのも、もっともなことなのである（O'Hara, Sellen, and Bentley 1999）。

とはいえ、ここでは、この現象には別の意味合いがあることを強調しておきたい。まず、この現象は、われわれの認知の営みにおいて、エピソード記憶（**episodic memory**）が重要であるということを示している。エピソード記憶とは、過去に生じた特定の出来事をときにきわめてはっきりと思い出せるという能力に加えて、その場面の付随的な（**incidental**）性質・特徴について思い出せる能力のことをいう。先ほどの例で言えば、何週間か前に本を読んでいたときには、今取り組んでいるスピーチや報告書を書くことは予定していなかった。そういった予定があれば下線を引いたり印をつけたりしていただろう。ところが今、そのときには予定していなかった課題に集中して取り組みながら、以前読んだときには自分の興味の中心にはなかったであろう事柄を思い出すのである。さらに付け加えるなら、その本を読んでいたときには、ページのレイアウトではなく、ほぼ確実に、その内容に注意を向けていたはずである。それでも、内容を把握するためには、紙の上に印刷された活字情報を処理する必要があったのである。本文のレイアウトといった付随的な性質・特徴は、単に記憶に残っているだけではなく、本文の内容と結びつく形で記憶されているのである。

すぐ上で考えた記憶の曖昧な引用文を探すという事例では、ページのどこにあったかを**明示的（explicit）**あるいは自覚的に覚えているのであった。しかしながら、過去の経験を自覚的に思い出せないこともよくある。しかしそういう場合でも、過去の経験は頭に蓄えられているはずである。何故なら、そのような経験によって以降の課題における行動は影響を受けるからである。こういう場合、**潜在（implicit）**記憶が関与していると言える（Schacter 1987）。例として、次の（1）の2文を比較してみよう。

第2章

辞書と文法書

——言語知識の生成文法モデル

The Atoms of Language において、Mark Baker は、もしも誰かに「英語とは何か」と訊かれたらどうするか、という思考実験を行っている (Baker 2001)。これは、かなり変わった問いに思えるかもしれない。しかし、第1章での議論からこの問いの背景が分かる。つまりこの問いは、われわれが個別言語というものをどう理解しているか、ということに関わっているのである。われわれは個別言語を、その母語話者が口から発したこと一切切目の目録などと考えているだろうか。Baker はこの考え方をとらない。すなわち、その仮想の対話者に対して、手に入る英語のコーパスを参照させたり、英語の本でいっぱいの本棚を指し示し「あれが英語だ」と言ったりはしない。以下のように、個別言語とは、文を構築するための仕組みであると考えているのである。

誰かに英語とは何かと尋ねられたとしよう。[...] そうしたら、次のように答えることができるだろう。「英語というのは、次の材料 (と言って、すべての英単語が載っている大きな辞書を手渡す) を次の文法規則 (と言って、辞書と同じくらい大きな英語の文法書を手渡す) に従って組み合わせることによって作られる文の集合体である。[...] 辞書と文法書があれば、それを読む者には、どんな英語の文の作り方も分かるだろう。」

(Baker 2001: 53–54)

この引用部は、私が思うに、現代の言語についての考え方に深く根を下ろしている言語観を示すものである。私はこれを辞書+文法書モデル

(**dictionary plus grammar book model**) ないし、より簡潔に言うと、**生成文法モデル (generative model)** と呼んでいる。このモデルによると、個別言語は2つの部門から成っている。そのうちの1つは辞書ないし語彙で、当該言語の語がすべて列挙されている。もう1つは文法ないし統語論(syntax; 統辞論とも)で、辞書から取り出された語を組み合わせて文にするための規則が列挙されている。Cruse (2000b: 238) はこの考え方を、Baker よりいくぶん面白みを欠く形で、次のように述べている¹。

[...] 個別言語に欠くことのできないものとして、まず、一連の基本的な単位があり、次に、それらを組み合わせて、句や文のような、より大きく複雑な単位にするための一連の規則がある。基本的な単位の日録は当該言語の語彙を構成し、一方、組み合わせの規則を詳細に述べたものは文法を構成する。
(Cruse 2000b: 238)

このモデルはまた、Jackendoff の *Foundations of Language* においても大きな意味をもつ。

人間の言語の可能な発話の数には際限がないので、言語使用者はそれらをすべて頭の中に蓄えておくことはできない。そうすると、言語に関する[...] 知識には2つの部門が必要になる。1つは組み合わせ可能な構成要素の有限の日録である。この日録は伝統的に「語彙 (lexicon)」と呼ばれており、その要素は「語彙項目 (lexical item)」と呼ばれている。[...] もう1つの部門は、組み合わせの原理の有限集合、すなわち、**文法**である。個別言語(ないし方言)の話し手の間に一致が見られる場合には [...], (いわゆる)「個別言語の文法」という表現が、その言語の話し手全員の頭の中にある知識に近いものを指す便利な言い方になりうるのである。(Jackendoff 2002: 39)

おおざっぱな定義を与えておくと、語彙というのは、長期記憶に蓄えられ

¹ Pawley (1985: 86) は、辞書+文法書モデルを次のような言語学者を引き合いに出してパロディー化している。すなわち、ある言語の文法と語彙を両方作成し終え、それからゆったりと腰掛け、満足してため息をつき、「仕事は終わった。これでこの言語の記述は完了した」と言う言語学者である。